
約束は守りましょう。

歌月 碧威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束は守りましょう。

【Nコード】

N3716N

【作者名】

歌月 碧威

【あらすじ】

ある日お隣の幼馴染のおじいさんに呼び出されてしまう。
そこで私を待ち構えていたのは、鬼ごっこへの無理やりの参加だった。

鬼ごっこの景品は、大粒のルビー。それとおまけに私。

大好きな幼馴染と大嫌いな幼馴染の兄・従兄VS私の鬼ごっこの結末は？

1 (前書き)

全3話予定なので、短いですが、元々短編予定だったので。

「しかし、いつ見ても広いなあ」

通された客間で私は、おかきを食べながら庭を眺めた。

池の向こう側にある松の木の所では、ちょうど植木職人によって、手入れが行われている所だった。

私、川瀬椿のお隣・一条家はすごい大きい。
かわせつばき

塀で囲まれた広大な敷地には、本邸と第二邸それから庭園と蔵が三つ。

他にも駐車場やおじさまの趣味のバイクを整備用ガレージなどがある。

一条家はここらへん一体の地主さんの上、おじさまもおばさまも会社の社長。

それにご先祖様はお殿さまに使える武士の家系だったんだって。

だから一条家にはいろいろな骨董品があって、骨董大好きのおじい様が管理している。

この間、織おりの所に遊びに行った時なんか、茶碗を一時間ぐらい眺めていたらぐらいだ。

「椿ちゃん、すまないね。待たせて」

「いいえ。おじい様」

顔を上げて、笑みが引き攣った。

グレーの夏物に着物を着たスキンヘッドの老人の後ろには、六人の美少年が立っていた。

——って、なんでこいつらもいるのっ!?

だってそこには、私の嫌いな人達がいたのだ。

彼らはスキンヘッドの老人……この家の主・おじい様の孫。

ここに住んでいるのは織と織のお兄ちゃん・昂の2人で、後の4人はそれぞれ近くにある屋敷で生活中。

織っていうのは、一番左端で仏様のような表情をしている男の子。

私と同じ年の16歳で、高校も一緒。

もちろん、クラスも幼稚園からずっと一緒だ。

織とは年が一緒だからか、小さい頃から一緒に遊んでいた。

言うならば、幼馴染の関係。

だから、織は別。

だって織は優しいし、勉強とか宿題とか教えてくれるし。

何より、小さい頃から私の言う事を聞いてくれている。

幼稚園の頃なんかは、勝手に織のおやつも食べてたぐらいだ。

我ながら食い意地が張ってたと思う。

でも織が「いいよ」と今と変わらない、ゆっくりとした口調で、ちゃんと了承してくれたもん。……私がもう食べ終えた後だったけど。

だけど、織以外の連中は嫌い。

一見、見目麗しいけど性格が最低。

昔から人の事、豚足って言ったりブスって言ったり。

織に持ってきたバレンタインのチョコとかも、あいつらが勝手に食うし。

「なんでおじい様以外の人もいるんですか？ 織は良いけど」

あからさまに顔に出たと思う。

それぐらい嫌いだ。こいつらに何度泣かされてきた事か。

それだけに、織が余計癒し系に思える。

「いやいやすまないね、椿ちゃん。今日、椿ちゃんにわざわざ来て貰ったのは、こやつらにも関係あるんだよ」

おじい様は反対側に座り、他の奴らが私の方へと座る。

織以外の連中に前方以外を囲まれてしまい、織を恨んだ。

せめて隣りに来なさいよ!!

「これ、着けて見てくれないかい？」

「？」

渡されたのは、長ひよろい箱。

開けてみると、赤い大粒のルビーのネックレスが入っていた。
マスカット大の大きさだ。

時価総額いくらぐらいなの!? まさか、億かないよね!?

「これは代々一条家に伝わる物なんだよ。取りあえず着けるだけ着けてくれないかい？」

「はぁ……」

なんだか良くわからないけど、着けてみた。

粒が大きいせいか、重く感じる。

うう。傷とかつけたら、絶対弁償とか出来ないっ!!

一条家と違い、うちはただの一般庶民。

お隣という接点があれば、こんな家の人と仲良くなんて出来ない
ような身分だ。

「もう外しても？」

「いや。これから始まるんじゃないよ」

あゝ? さっぱり意味がわからないんですが。

「椿ちゃんには、まだルールを説明してなかったのう。何、簡単な事
じゃよ。これから皆には鬼ごっこをして貰う。鬼は椿ちゃん。椿ち

やんを捕まえてネックレスを外した者のみ、このルビーのネックレスを椿ちゃんごとやろう」

——ん？私ごと？

「……おじい様。今、わたしごとって言いませんでした？」
きつと聞き違いだ。

良識あるおじい様が、そんな事いうはずなんてない。

「言ったぞ。椿ちゃん。わしは、椿ちゃんを孫に欲しくのう。だから、この中のやつと結婚してしまえば良いって考えたのじゃ」

「いや、ちよつと待って下さい」

「何、大丈夫じゃ。椿ちゃんはハンデとして、15分前に逃げれるからの」

15分あれば全然大丈夫ってなるわけないじゃん。
というか、そもそもおかしい。

「あの、私が言いたいののは、そんなこ——」

「では、準備は良いか？よーいスタート！！」

「ええっ!？」

もう逃げるしかなかった。

だっておじい様は、話聞いてくれないし。

2

あいつら、しつこいすぎ。

よじ登った木の上で、私はつかの間の休息を得ていた。
早く体力回復しなきゃ。

さっきから、あの男達に見付かつては逃げるを繰り返していた。
運がいい事に、私は中高と陸上部所属。
その上、自慢じゃないが大会では上位に入るぐらい早い。

……あゝ、お風呂入りたいよ。
襟元をパタパタと手で動かし、服の中に風を送り込むがさっぱり涼しくならない。もう背中汗でぐっしよりで肌くっついてしまっている。

大体、金持ちなんだからルビーぐらい買えばいいのに。
うちと違うんだからさ。
彼らの本命は、このルビーで私はおまけ。

そもそもなんで私がこんな目に逢わなきゃならないのよーっ!!
織もただ見てないで、止めなさいっうの。
いつものように、にこにこしてさ。

私があの中の誰かと結婚しても良いって言うの!?

「……良いんだろうなあ」

誰でもなく、自分が眩く。

だって、私の事好きなら血眼で探してくれるはずだもん。
他のやつらには何度と見付かったけど、織には一度も見付かってな

い。

それどころか、声すらも聞かない。

私の事探してくれているなら、他のやつらみたいに私を呼ぶ声とか聞こえて来るはずなのに。

それなのに、織の姿は見当たらない。

棄権して、どっか行ったのかな――

ずっと織に一番近い女の子はずっと自分だって思ってた。

でも、それは幼馴染としてなんだと思う。

織の周りに集まる女の子達可愛いもんな。

しかも織、モテるし。

「約束したのに。私だけ覚えてるなんて馬鹿みたいじゃん……」

それは幼稚園の頃、織と交わした約束。

あの頃ちょうど親戚の結婚式に呼ばれた後で、自分も花嫁さんになりたかった私は、織にワガママを言った。

その辺に生えている花で作ったブーケもどきに、シロツメグサで作った冠。

織はせっせと子供ながらに考えて準備をしてくれた。

でも私は、色鮮やかなブーケとあのキラキラしたティアラじゃないと嫌だと泣き叫んだ。

『ごめんね、椿ちゃん。大人になったら、僕が全部叶えてあげるから』

泣き叫ぶ私を、あいつはそう言って慰めた。

『絶対？』

『うん。だから、椿ちゃん僕のお嫁さんになって』

『うん。私、織のお嫁さんになる。じゃあ、約束のキスしよう！！』

『うん』

なぜ、あの時指切りげんまんじゃなかったのだろうか？
高校生になった私は、さすがにツツコミたい気分だ。
きつと、ませてたんだろうな、私。

「どれ、そろそろ移動するか」

木の上は見付かりにくいと思うけど、念の為に移動した方が良いでしょう。うな気がする。

木を降りるために腰を浮かせかけた瞬間、体が大きく揺れた。

自分が足を滑らせたと思った時には、さっきまで自分の居た木の枝が見えていた。

「……あれ？」

予想に反してあまり痛くない。

地面に落下したはずなのに、思いのほか強い衝撃は受けなかった気がする。

「椿ちゃん、大丈夫？」

耳元で聞こえてくるこの声を聞いて全てがわかった。

安堵感に今まで張り詰めていたものが、全て解ける。

こんな時でもいつもと変わらないゆったりとした声に、伸びている語尾。

きっと気が短い人なら、さっさとしゃべれ！！って怒鳴りそうな声音。

「――織」

「椿ちゃん。そんなところ昇っちゃ危ないよ。僕が来なかったら、どうなったと思うの？」

落下した私を、織が受け止めてくれてたのだ。

「ありがとう、織。怪我とかしてない？」

「平気。椿ちゃんを守るのは、僕の役目だから」
私は立ち上がると、織に手を差し伸べる。
織が私の手を握ると、私はその手首を凝視した。

「どうしたの？それ」

たまたま視界に入っただのは、赤い痕。

何か細長い縄のようなもので縛られていたのか、織の両手首には赤い痕がついていた。

「んー、これ？兄貴達に邪魔だって両手足縛られてたんだー。だから、ごめんね。椿ちゃんを探しにくるの遅れちゃった」

「はあ！？縛られた？」

「うん。でも良かった。椿ちゃんが、誰にも捕まえられてなくて」
「ほんとよかったよ。織がみつけてくれて。あいつらやっぱ最低だね。織の事縛るなんて。赤くなってるじゃんか。このルビーのために、必死すぎ」

私はネックレスのチェーンを持ち、ルビーを視界に入れる。

まあ、気持ちはわからないでもないけどさ。

「ねえ、椿ちゃん。もしかして気づいてない？」

「何が？」

「兄貴達はルビーが欲しいんじゃないって、椿ちゃんが欲しかったんだよ。兄貴達椿ちゃんの事昔から好きだから」

「はあ！？それ、織の勘違い。普通好きな子には、ブスとか豚足とか言わないから」

だから、それは絶対にありえない。

「それは、かまって欲しいからだよ。椿ちゃん、昔から僕とばかり遊んでたから」
だってあいつらが意地悪だったもん。

砂場で友達とお城作ってたらそれ崩されたり、苦手なカエル持ってきたり。

そんな事されて、だんだんあいつらに近づかれるのすら嫌になっていった。

「今回の騒動、そもそも椿ちゃんが原因なんだよ？」

「私？」

「そう。合コンなんかに行くから」

……合コン

あゝ、もしかしてついこの間のやつ？

私には、心当たりがあった。

人数が足りなくて、「どうしても今回だけ」って頼みこまれて行った合コンがある。

「椿ちゃんが合コンに行くなら、自分たちにもチャンスがあるって兄貴達今回この騒動を起こしたんだよ」

「これ、あいつら考えたの!？」

「うん。だから、ルビーなんて関係ない。メインは椿ちゃん」

「こういう物みたいな扱い嫌」

だって私の意思関係ないもん。

私は織が好きなのに。

「うん、ごめんね」

「なんで、織が謝るのよ？」

「だって僕もこの話にのったから。僕も椿ちゃんが欲しかったんだ――」

この時の織の綺麗な顔がいつもと違って見えるのは気のせい？

なんか、男って感じがする。

いや、織は男なんだけど……

私は急に織が織じゃなく感じてしまい、困惑し始めてしまう。

「僕はあの時のままの気持ちなのに、椿ちゃんは違う。その上、だんだん綺麗になっていって余計僕から離れちゃっていくし」

「織、視力たしかいいよね？」

目が悪い？って言いたいんだけど、織の視力は1.5とかなり良い。だんだん綺麗になっていくって――

「それ気のせい。そんなに綺麗なら、告白なり手紙なりあるでしょ？」

私、経験した事ないもん。

あ、でも小学生の頃はあるよ！！って、自慢になんないか。

「うん、あるよ。あ、でも椿ちゃん知らないかも。下駄箱や机にある手紙は僕が毎日チェックして在ったら回収してるし、告白してきそうな男は全部潰してきたから」

「――は？」

「今日天気いいね」的なのほんとした空気と口調で、何をさらっと言ってるんだ！？こいつ！！

織の浮かべている仏様のような笑みが、一気に黒く感じる。

「お、織。私の事好きだったの……？」

「うん。ずっと好きだよ。あの約束の日から僕の気持ちは変わってない」

「約束って、あの幼稚園の時の？」

「そう。僕たちのファーストキスの時」

その事は言うな〜っ！！

なんであの頃赤面せず、今赤面するんだ私！？

「織も覚えててくれたんだ……」

「当たり前だよ。――って、あれ？織もって言った？」

織は首を傾げ、私を見つめている。
覚えているのは、私だけと思っていた約束。
ちゃんと織も覚えててくれた。

「ねえ、約束はちゃんと守らなきゃならないよね？」
「うん」

「じゃあ、守ってね。ちゃんと私の事織のお嫁さんにして」
「もちろん。ねえ、椿ちゃん。じゃあ、その約束を守る約束のキス
しようか？」

「約束を守る約束のキス？なんかややこしいわね」
頬に触れられた織の手はちよっと汗ばんでいた。
近づいてくる綺麗な織の顔。

それはあの頃の面影はあまりなく、男らしいつくりへとなっている。

あのませていた子供の頃と違って、シロツメグサの王冠でもその
辺に生えてる花で作ったブーケもどきでも全然構わないよ。
そのかわり、相手は織限定だけだね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3716n/>

約束は守りましょう。

2010年10月9日17時46分発行